介護老人福祉施設におけるレクリエーションの現状と課題

Recreation in nursing homes and its challenges

古市 孝義¹, 金 美辰¹

¹大妻女子大学人間関係学部人間福祉学科

Takayoshi Furuichi¹, Kim Mijin¹

¹ Department of Human Welfare, Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University

キーワード：介護老人福祉施設，高齢者，レクリエーション，課題

Key words : Nursing home for the elderly, Senior citizens, Recreation, Difficulty

抄録

本研究では、先行研究より介護老人福祉施設における高齢者のレクリエーションの現状と課題を把握し、レクリエーションの満足度を把握することで、高齢者の生活の質を高めるレクリエーションのあり方について考察することを目的とした。調査結果より、介護老人福祉施設へのレクリエーションは施設外でのレクリエーション満足度が高いことから、地域資源の活用が求められることが推察できた。レクリエーションを提供するにあたって、介護職員はレクリエーションに関する知識を得ることや意義を理解したうえでレクリエーションに臨むことが求められることが推察できる。課題としてはレクリエーションを行うこと自体が目的になる傾向があり、レクリエーションを提供するための時間や人手不足が挙げられる。今後はレクリエーションへの利用者満足度の調査を行い、利用者の生活の質を高めるレクリエーションについて考察することが必要であると考えられる。

1. はじめに

平成 30 年度版高齢社会白書によると、わが国の 65 歳以上人口は 3,515 万人で総人口に占める割合が 27.7% となった。このうち、前期高齢者(65~74 歳人口)は 1,767 万人と総人口に占める割合が 13.9% で、後期高齢者(75 歳以上人口)1,748 万人の総人口に占める割合が 13.8% となり、後期高齢者の割合が延伸し続けている¹⁾。さらに、2018 年の平均寿命は男性 81.25 歳、女性 87.32 歳と過去最高水準となった。このような平均寿命の延伸や後期高齢者人口増加に伴う医療費や介護費用負担増加から、健康寿命の重要性が強調されるようになった。2016 年現在の日本の平均寿命と健康寿命との差は、男性 8.84 歳、女性が 12.35 歳である²⁾。WHO で提唱された健康寿命「健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間」と平均寿命の差は、介護や誰かの世話を必要とする期間である。つまり、医療費や介護にかかる費用負担が増加することを意味している。厚生労働省の「健康寿命のあり方に関する有識者研究会」(2019

年 3 月)において、健康寿命が定義され、2016 年から 2040 年までに男女ともに健康寿命を 3 年以上伸ばし、75 歳以上を健康寿命の延伸目標としている³⁾。内閣府「高齢者の健康に関する調査結果」(2017 年 3 月実施)によると、全国 55 歳以上の男女が日頃心掛けている健康活動として「栄養のバランスのとれた食事をとる」「健康診査などを定期的に受ける」が高い割合を占め、次いで「休養や睡眠を十分にとる」「散歩やスポーツをする」が挙げられた⁴⁾。健康に対する意識の高さは、地域で生活している高齢者のみならず、介護老人福祉施設で日常生活を送っている高齢者にとっても同様である。可能な限り地域で暮らしていた時と同じ日常生活を送ることができる支援が求められるなか、利用者が高い健康意識を持ちながら健康の維持・向上できる支援が不可欠である。

介護老人福祉施設での健康寿命を延ばす取り組みとしては、レクリエーションが挙げられる。現在わが国ではレクリエーションといった余暇活動は施設のみならず、個人の目的に応じて自己の可

能性を試したり、社会参加をしたり、創造性の発揮のために行う自発的なものとされており、活動自体が目的となっており大衆化、多様化、大型化している。その中でも高齢者に対するレクリエーションは、一般の人を対象とした活動と異なり、効果的なレクリエーション財を意図的に活用することで、心身機能の低下防止や生活の改善に向けての活動とされている。さらに、それぞれの活動が生活の中に定着するように支援しなければならないとされている⁵⁾。その一方、現在施設で行われているレクリエーションは“幼稚さ”が指摘されているため、利用者の多様なニーズを踏まえたレクリエーションプログラムが開発されてきている⁶⁾。現在レクリエーションの重要性は評価されるようになってきているが、利用者に合わせてレクリエーション活動が行われている活動は少なく、施設における生活満足度調査の報告では生活満足度に影響を与える要素の一つにレクリエーションが含まれている。反面高齢者施設のレクリエーションに対する満足度調査の報告は少ない。また、介護老人保健施設の日常生活満足度とその関連要因に関する調査によると「レクリエーション」や「リハビリテーション」に対する満足度が40%台と低く、現在介護老人福祉施設におけるケアは入所者の身体的ケアが中心となっており、「生きがい」や「楽しみ」などQOLに対する支援が充足していない状況が報告されている⁷⁾。

介護老人福祉施設において健康の維持・向上を目指しながら生活を充実させるためには、日常生活で質の高い介護の提供とともに生活を豊かにするためのレクリエーションの充実が欠かせないのではないかと考える。そこで本研究では先行研究をもとに、介護老人福祉施設における高齢者のレクリエーションの現状と課題を把握することを目的とする。

2. 研究方法

介護老人福祉施設における高齢者のレクリエーションの現状や課題を探るため、医中誌 Web で検索を行った(2019年10月10日検索)。「施設」「高齢者」「レクリエーション」「効果」のキーワードの検索を行った結果、71件の文献が抽出された(2019年10月10日検索)。その中からリハビリテーションに関するものが31件、地域に関するものの9件、障害者に関してのもの1件、研究対象が

医療関連である保健医療に関するもの22件を削除した結果8件に絞られた。

3. 結果

1) 高齢者福祉施設におけるレクリエーションの現状

レクリエーションとはラテン語の「recreare」が「recreationen」となり、フランス語の「recreation」を経て現在の「recreation」となったといわれている⁸⁾。福祉レクリエーションを財団法人日本レクリエーション協会では「福祉レクリエーションとは、何らかの形で国家・社会からのシステマ的生活援助・支援(公的社会を包含して)を必要としている人々が、その生活や人生過程の中で楽しみや喜びを求めて行う行為・活動である。そして、その意味するところは、そうした人々の可能な限りの心身の健康と幸福な生活・人生の(再)開発に連動しなければならないということである。すなわち、福祉レクリエーションとは、社会福祉サービス利用者が健康と幸福とを迫及する際の基本的人権保障の実践である。」と定義している。さらに「21世紀のレクリエーションのヴィジョン」で、「レクリエーションの具体策」として、以下の4項目を挙げている。1. 生涯スポーツの推進、2. 芸術・文化・学習活動への取り組み、3. 「ネイチャーレクリエーション」の普及、4. 福祉レクリエーションへの取り組みそして、特に4点目の福祉レクリエーションへの取り組みにおいてはすべての人のゆとりある健康生活の実現を目指すものとして(1)権利としてのレジャー・レクリエーション活動を推進する(2)レジャー・レクリエーション活動は「生活の質の向上」に不可欠のものである(3)レジャー・レクリエーションへの参加機会を拡大し、自立的活動を支援すると記された⁹⁾。また、垣内は「レクリエーションとは「生活の袂」となるためのすべての行為である。日々を楽しくのびのびと過ごすことができるような、四肢の運動、視覚・聴覚・味覚・触覚・嗅覚の五感を含むすべての行為である」と述べている¹⁰⁾。レクリエーションには、「解放」と「緩和」の要素が含まれている。利用者はレクリエーションといった「解放」と「緩和」によってこれまで気づかなかった自分や、喜びを味わい、自己を再創造するとされている。幸福感、満足感を前提にしたレクリエーションは、健康で日々の生活を充実した楽しいも

のとするために重要な意味を持っている¹¹⁾。施設に入所する高齢者にとって生活の質の向上に欠かせないものであると考えられる。

現在高齢者福祉施設は、多くの施設がレクリエーションを実施しており、未実施の施設でも今後何らかの取り組みを行いたいとの見解を示している。施設でレクリエーションを実施する目的は「残存機能を維持」「認知症の予防、進行の防止」「豊かで楽しい生活の支援」とされており、具体的な支援内容としては「専門的アクティビティ」「予防的アクティビティ」「余暇活動的アクティビティ」に分類されている。レクリエーションの目的を明確にして実施することがアセスメントや記録、評価の充実につながるということが明らかになっている¹²⁾。音楽活動、遊戯及びゲーム、美術工芸・手芸工作、野外活動及び自然探求の活動が中心であり、実際の活動ではレクリエーションに参加する当事者の意見を反映しており利用者が希望するレクリエーションと概ね一致している。実施方法は利用者を一斉に集めて開催するレクリエーションが主流である¹³⁾。利用者の意見を反映したレクリエーションを実施することで利用者の生活の質を高める介護が行えるといった効果が期待できるのではないだろうか。

レクリエーションを実施するうえでの問題点や阻害要因は職員数や職員のレクリエーションへの無関心、知識不足、利用者の疾病や高齢などによる心身機能やADL (Activity of Daily Living) に関する問題といった利用者の身体的側面、精神的側面や、職員の知的側面、指導的側面が中心として挙げられている¹³⁾。高齢者の生活に関する調査によると性別による違いも明らかになっている。特別養護老人ホームの男性入所者は「みんなとおしゃべりをするよりは、本や新聞を読むなど、自分のことをしたい」としている一方、女性利用者は「他の利用者と情報交換するのがとても楽しみである」との意見が挙げられていることが報告されている。また、望まれるレクリエーションとしては年間行事が高い評価を得ており、施設に限定されない広く地域の中での活動を望んでいる利用者が多いことが明らかになっている¹⁴⁾。現状の施設職員数、介護職員の勤務形態では、レクリエーションを実施する十分な時間が確保できないこと、レクリエーションについて十分な時間を確保できないことが想像される。そのような中で、レクリ

エーションを実施する際は集団で行うレクリエーションも重要であるが、個別（性別や年齢）に合わせたレクリエーションの検討が重要である。勤務形態や、レクリエーションについて学ぶ時間は介護職員個人の努力での解決は期待できない。そこで、レクリエーションを介護業務の中の重要な位置づけとして施設や法人が意識して取り組むことが求められるのではないかと考えられる。

介護老人福祉施設におけるリハビリテーションは、高齢者の健康の維持・向上に向けて重要な働きをしており、利用者の残存機能の維持や認知症の予防、豊かで楽しい生活の支援を行うことを目的としている現状にあった。介護老人福祉施設でのレクリエーションは、利用者の生活の質の向上のための一要素として重要な役割を担い、レクリエーションは高齢者福祉施設にとっては欠かせない一つの要素だと考えられる。現状では、高齢者に対するレクリエーションには様々な種類が提供されており、利用者の認知度や身体機能に合わせたレクリエーションを行うことが重要とされている。同時に利用者の性別や年齢、趣味、嗜好に合わせたレクリエーションを検討することが重要である。またレクリエーションを実施していくなかで、柔軟に利用者に合わせてレクリエーションを提供するためにも利用者の情報収集が介護職員に求められる能力であるものと推察できる。これに加えて、介護職員はレクリエーションを提供するにあたって、日々行うレクリエーションに関する知識を増やし、利用者に合わせてレクリエーションの開発・検討が求められる。介護老人福祉施設の人手不足や不規則な勤務形態からレクリエーションに対する十分な時間や意識を保つことが難しい現状を踏まえた対策が必要であると考えられる。

2) 高齢者福祉施設におけるレクリエーションの効果

介護老人福祉施設を対象としたレクリエーションの効果には、身体機能の回復、維持及び向上と脳の活性化・認知症予防と、レクリエーション活動を通してコミュニケーションを図ることにある¹⁵⁾。介護老人福祉施設で行われるレクリエーションは、高齢者の身体機能の維持・向上、認知機能の維持、身体機能の維持、生活の充実が挙げられている。しかし介護老人福祉施設におけるレクリエーションは、レクリエーションの行為自体が目

的であることが課題であり、介護職員の業務との時間配分、集団・個別実施などの実施形態、利用者の満足度の観察が重要であるとされている¹⁶⁾。一般的にレクリエーションは自己の解放に向けた楽しみとしてのみならず、レクリエーション自体が目的となることは大きな問題ではない。介護老人福祉施設におけるレクリエーション自体が目的となると、本来の高齢者に対するレクリエーションの効果が薄れてしまう恐れがある。介護老人福祉施設の利用者が自らレクリエーションに対するニーズを発信しやすい環境づくりを行い利用者がより楽しめるレクリエーションを利用者と共に職員が開発するような取り組みが重要だと考える。利用者の楽しみを発見するためには、介護職員は利用者を丁寧に観察し利用者から様々な情報を引き出すことができる環境づくりや、アセスメント能力が求められるのである。

集団レクリエーションを行うことによって「BPSD」、「介護者にとっての負担度」、「周囲との生き生きとした交流」「自分らしさの表現」「対応困難行動のコントロール」が高齢者のレクリエーションに効果があるとされる。つまり、集団レクリエーションへの介入が利用者の精神的側面に対して良好な効果をもたらし¹⁷⁾、参加者の陰性気分を低下させ、陽性気分を高揚させる効果があり、その活動は、「楽しさ」「充実感・満足感」「達成感」などの精神的側面に影響することが明らかになっている¹⁸⁾。また、散歩や体操といった簡単な運動により高齢者の鬱症状の改善、情動安定が図られる¹⁹⁾。一般の高齢者を対象とする場合に比べ閉じこもり傾向のある高齢者に対してレクリエーション提供を行う場合はその運動強度の設定が重要であることが示唆されており、閉じこもり高齢者を対象に運動介入を行う場合は、体力増強に合わせて運動強度や運動時間に変化を加えていく必要がある²⁰⁾。またレクリエーション中に行う作業は、利用者の意欲の維持・向上のために重要な役割を果たし、身体機能、認知機能、自己効力感を高めるためのアプローチとして有効である²¹⁾。レクリエーションを実施する際はレクリエーションそのものの持つ楽しみに加えて、グループメンバーの相互作用による雰囲気の影響が重要である²²⁾。利用者の意欲を高めるためには、身体機能、認知機能へのアプローチのみだけではなく、レクリエーション提供の際の場面に気を配るといった利用者

自身の自己効力感を高めていけるような心理的なアプローチが有効なのである²³⁾。

レクリエーションの種類といった点に着目すると、高齢者は人生の中で子や孫を育ててきた環境から、人形といったツールを用いたレクリエーションの効果も注目されている。赤ちゃんの人形を活用することで夫婦の関係性の再構築に用いることが可能であったり²⁴⁾、手作りの日本人形を用いる事で利用者の精神的、身体的機能が向上することが明らかになっている²⁵⁾。体を動かすのみならず、赤ちゃん人形や日本人形を活用することで、精神面での安定を図るということが明らかになっている。人形といったツールを用いる場合、利用者の成育歴や家族環境にも留意した活用や人形の種類や大きさ、形といったツールの細部に至るまで気を配ることが求められると考えられる。またレクリエーションにはコミュニケーションが増えることで、職員の利用者に対するアセスメントにつながり、利用者から職員や周囲へ時代や価値観の伝承の意味を発揮する価値のあるものである²⁶⁾。つまりレクリエーションといった役割は介護における利用者との関係性において介護職員と利用者の信頼関係構築に向けては重要な視点なのではないかと考えられる。

レクリエーションを考えるうえで必要な点に①レクリエーションの個別支援計画の重要性②レクリエーション専門知識の必要性③社会資源の活用必要性が挙げられており、レクリエーションの実施には目的や効果の計画や、レクリエーションに関する専門的知識があつてこそ効果のあるレクリエーションが実施できるのである²⁷⁾。一方で、レクリエーションを行うにあたって目標を定めると、その目標が達成できたか否かによって精神的満足度に違いが表れ、目標が達成できなかった場合の心理的支援の重要性が報告されている²⁸⁾。レクリエーションを効果的に行うためには、利用者理解を深めて介護職員が利用者にとどの様な効果が表れるかを意識した計画を立案し、目標が達成できなくとも利用者が精神的に満足できるようなレクリエーションを計画することが重要であると推察できる。

4. 考察

1) 介護老人福祉施設におけるレクリエーションの現状について

レクリエーションは身体機能すべてを活用して行う五感を活用した行為であり、「生活の質の向上」に不可欠とされ、自立的活動を支援するものであると定義されている^{8, 9)}。介護老人福祉施設の利用者にも同様のことがいえる。身体機能、知的機能が低下していく高齢者に対してレクリエーションを実施し五感を活用することで残存機能の維持・向上が期待できる。また、地域生活から離れて日常生活を送っている利用者にとってレクリエーションを通して介護職員やボランティア、地域住民と関わりを持つことは社会とのつながりを保ち続けるツールであると考えられる。レクリエーションは介護老人福祉施設の利用者にとって、体を動かす機会であり、地域とのつながりを保つ役割を果たしている。そこでレクリエーションに関わる介護職員には単純に体を動かすのみならず、利用者の社会性や地域での役割といった視点を持ちながらレクリエーションを実施することが求められる。またレクリエーションは、利用者の積極性、自発性、自由度を重視したものであり、その場にいる人々がお互いに学び合え、尊厳が守られなければならない。利用者が自発的に選択し、リハビリテーションの要素を踏まえたレクリエーションであり、地域密着型のレクリエーションが望ましいとされる²⁹⁾。これらのことからレクリエーションの内容や方法について利用者本人と介護職員が十分に話し合い、地域に開かれたレクリエーションの実施が望ましいと考える。このように利用者や介護職員がレクリエーション自体を目的として捉えるのではなく、それぞれが自ら発信していくレクリエーションを計画することが、利用者の身体的、精神的、社会的自立支援につながり、利用者や介護職員間の更なる信頼関係の構築につながると推察される。介護老人福祉施設利用者の満足度調査によると、レクリエーション活動の中でも満足度が高いものは、花見や遠足といった施設外での催し物である。レクリエーションは施設内に限定するのではなく、地域の中で行われる活動を望んでいる利用者が多い³⁰⁾。レクリエーションには高齢者の生きてきた人生を伝える「伝承」の効果があることが明らかになっている。そのためレクリエーションの役割には利用者が自分たちの人生を伝えていくと同時にその後の人生に主体性や社会性を保つための役割があることを意識しながらレクリエーションを計画することが重要であ

ると考える。

レクリエーションを通して介護の質の向上につながる事が明らかになっている¹²⁾。レクリエーションは利用者と介護職員間のコミュニケーションの時間が延びることで、普段の関わりでは知り得なかった利用者の残存機能や知識、能力に気づくことができる。日々の利用者とのコミュニケーションと同様に、レクリエーション実施中のコミュニケーションから得られる利用者の情報を活用することでより利用者の望む日常生活の支援につながる事が考えられる。

レクリエーションの問題として、介護老人福祉施設の利用者の身体的状況、精神的状況や職員の知識不足、レクリエーションに対する意欲の低さが問題で、効果的なレクリエーションが提供されていないことが指摘されている。これには、介護職員としてレクリエーションの効果を理解していないことが問題なのであると考える。まずは介護老人福祉施設の介護職員がレクリエーションの効果を理解することで利用者の生活の質（QOL）の向上に向けたレクリエーションの提供が可能になると考える。このことが介護職員に理解されることで、利用者の身体的状況や精神的状況に合わせたレクリエーションの提供できるとともにそこから知り得た情報でより利用者のニーズに合わせた介護の提供につながり介護の質の向上につながるのである。

現状では、レクリエーションの効果については明らかになっているものの、介護老人福祉施設でのレクリエーションの活用は十分ではない現状にある。今後は介護老人福祉施設において継続的かつ利用者が自発的に参加できるレクリエーションの工夫が求められる。

2) 高齢者福祉施設におけるレクリエーションの効果について

レクリエーションは身体面や精神面に効果的であり、自己効力感の向上にも繋がる重要な支援の一つである。利用者の生きてきた人生や価値観を伝承する役割をも担うことができるため、利用者の生き甲斐を再構築する機会につながると考えられる。そのため、レクリエーションはその場の雰囲気づくりが重要である。レクリエーション自体の効果も含め、参加者同士のコミュニケーションを通じたやりがいや、やる気を引き出す場となり

得る。そこで、レクリエーションを提供する専門職はその場が良好な雰囲気になることを心掛けなければならない。利用者間で楽しめる場づくりを意識し、利用者や職員等と参加者同士の関係性を考慮しながらレクリエーションを提供することが求められる。

レクリエーションには、認知症高齢者の BPSD の改善や介護者の負担軽減に寄与する役割があるとされ、継続的にかつ利用者が望むレクリエーションを行うことによって利用者の精神的側面に良好に働く効果がある。更に、介護の質の向上や、利用者の生活の質の向上に寄与する。これらのレクリエーションは身体機能の回復、機能維持・向上、脳の活性化、認知症予防や職員と利用者間のコミュニケーションを通じた人間関係の構築に効果的である。レクリエーションがもたらす効果を意識したレクリエーションを提供できる介護職員の育成が求められる。しかし、実際の介護福祉の現場においては利用者のレクリエーション満足度が高いとは言い難い現状にある。レクリエーションに参加する利用者の満足度を高めるためのレクリエーションの提供が必要である。

レクリエーションが高齢者の生活満足度に影響を及ぼすことから、レクリエーションを実施する際は以下の三つを意識した計画の立案や実施が必要であると考えられる。まず一つ目として、レクリエーションは利用者自身が選択することができる内容を計画し、効果的に実施して利用者の満足度を高めるために時には職員やボランティアといった地域住民等の地域資源の活用が求められる。二つ目としてレクリエーションは、体を動かすことで身体機能の維持・向上を図ることはもちろんであり、その成果を披露できる機会を提供することで生活満足度が高められることが推察される。三つ目には地域への外出や地域行事への参加等レクリエーションの活動の場を広げることが求められている。上述した三つことを実現するためには介護職員は地域と施設をつなぐ役割を担うことが求められ、個々の利用者のレクリエーションに対するニーズの把握や計画の立案を踏まえた施設内のレクリエーションの充実かを図るとともに、地域資源の把握や活用が必要である。

5. 本研究の限界と課題

本研究で得られた介護老人福祉施設における高

齢者のレクリエーションの現状や課題を踏まえ、今後は質的・量的研究方法で調査を行い、介護老人福祉施設で日常生活を送っている高齢者の生活の質を高めるための、レクリエーションのあり方について明らかにしていく。

引用文献

- 1) 内閣府. 平成 30 年版高齢社会白書 (全体版) (PDF 版) 内閣府 https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/zenbun/30pdf_index.html (参照 2019-10-10) .
- 2) 公益財団法人 生命保険文化センター. <https://www.jili.or.jp/lifeplan/lifesecurity/oldage/3.html> (参照 2019-10-10)
- 3) 「健康寿命のあり方に関する有識者検討会報告書 2019 (平成 31) 年 3 月」
- 4) 厚生労働省. 平成 29 年 高齢者の健康に関する調査結果 (概要) . 厚生労働省 https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_04074.html (参照 2019-10-11)
- 5) 杉浦春雄. 余暇 (活動) の種類-レクリエーションの福祉現場における有用性. 臨牀透析. 2018,34,8,p.15-23.
- 6) 朝倉和子ほか. 自立支援特化型高齢者デイサービスにおけるレクリエーションプログラムの再考-大学生との世代間交流の効果に着目して-. 東京家政学院大学紀要. 2014, 54, p. 1-8.
- 7) 宮崎つた子ほか. 施設入所高齢者の日常生活満足度とその関連要因 (第一報) -利用者の基礎属性からの検討-. 京都大学大学院研究科人間健康科学系専攻紀要健康科学. 2008, 3, p. 61-66
- 8) 一村小百合. 社会福祉におけるレクリエーション援助・活動の意義について. 関西福祉科学大学紀要. 2004, 8, p. 157-166
- 9) 山本清洋ほか. 特別養護老人ホームに於けるレクリエーションの現状-特別養護老人ホーム、高齢者レクリエーションの、福祉レクリエーション、レクリエーション支援、レクリエーション活動-. 鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編. 1996, 47, p. 71-88
- 10) 垣内芳子. 社会福祉におけるレクリエーション観. 社会福祉学. 1985, 26, 1, p. 63-82

- 11) 前掲 8)
- 12) 照井孫久ほか. 高齢者施設におけるアクティビティの実態. 老年精神医学雑誌. 2006, 17 (11), p. 1199-1207
- 13) 森山千賀子ほか. 日本の高齢者施設における余暇活動の現状と課題-QOL の向上に効果的な余暇活動とは-. 白梅学園大学・短期大学紀要. 2009, 45, p. 49-67
- 14) 西口宏美. 介護サービスに対する利用者の満足度と Well-being 感に関する研究-通所リハビリテーションの利用者を対象として-. 日本経営工学会論文誌. 2008, 59, 2, p. 137-144
- 15) 奥野孝昭・渡辺嘉久編. レクリエーション論. 相川書房, 1997, p. 144
- 16) 小池和幸ほか. 介護予防教室における目的別レクリエーションプログラムの開発と効果に関する研究. 仙台大学紀要, 2009, 41.1, p. 57-66
- 17) 坂本将徳ほか. 集団レクリエーション介入が認知症高齢者における行動・心理症状 (BPSD) および QOL に及ぼす効果. 理学療法科学 2017, 32 (4), p. 487-491
- 18) 杉浦春雄ほか. レクリエーション活動前後の気分プロフィール (POMS) の変化について. 岐阜薬科大学教養系紀要. 2003, 15, p. 17-33
- 19) 水野裕ほか. 認知症高齢者に対する運動介入の効果について-無作為割り付け比較試験-. 老年精神医学雑誌. 2007, 18, p. 68-76
- 20) 國方弘子ほか. レクリエーション療法の有効性に関する研究-自己に対する知覚の変容に着目して-. 精保看会誌. 2000, 9, 1, p. 32-41
- 21) 磯直樹ほか. 特別養護老人ホーム利用者の意欲維持における要因の調査. 長崎作業療法研究. 2014, 9 (1), p. 21-26
- 22) 小池和幸ほか. 介護予防教室における目的別レクリエーションプログラムの開発と効果に関する研究. 仙台大学紀要. 2009, 41, 1, p. 57-66
- 23) 朝倉和子ほか. 自立支援特化型高齢者デイサービスにおけるレクリエーションプログラムの再考-大学生との世代間交流の効果に着目して-. 東京家政学院大学紀要. 2014, 54, p. 1-8
- 24) 畑野相子ほか. 認知症高齢者の攻撃性に対する赤ちゃん人形療法の効果. 人間看護研究. 2011, 9, p. 21-35
- 25) 浅井恭子ほか. 「手作り日本人形」の導入による施設入所中の軽度認知症を有する高齢女性の健康度の改善. 東京福祉大学・大学院紀要. 2011, 2, 1, p. 59-65
- 26) 森山千賀子ほか. 日本の高齢者施設における余暇活動の現状と課題-QOL の向上に効果的な余暇活動とは-. 白梅学園大学・短期大学紀要. 2009, 45, p. 49-67
- 27) 杉浦春雄. 余暇 (活動) の種類 - レクリエーションの福祉現場における有用性. 臨牀透析. 2018, 34, 8, p. 975-983
- 28) 白石卓也ほか. 目標設定したウォーキング介入が高齢者に及ぼす心理的影響. 日農医誌. 2016, 65, 2, p. 285-290
- 29) 竹林千穂里ほか. 特別養護老人ホーム利用者の意欲維持における要因の調査. 長崎作業療法. 2014, 9, 1, p. 21-26
- 30) 山縣恵美ほか. 閉じこもり傾向にある高齢者の教室型プログラム参加につながる要因と継続要因. 老年社会科学. 2018, 40, 1, p. 42-53
- 31) 前掲 14)

Abstract

The purpose of the present study is to understand the conditions and challenges faced while conducting recreational activities for elderly residents at nursing homes and determine the level of satisfaction in this regard based on previous studies. By doing so, we aim to discuss recreation that would improve quality of life for elderly residents. The survey result indicates that since the level of satisfaction is high for recreational programs offered outside of nursing homes, demand for community resources is assumed. When organizing recreational programs, nursing staff need to learn about recreation and understand its significance. Challengingly, there is a tendency for recreation itself to become the objective, leading to a dearth of time and staff to organize the recreational programs. In the future, we need to analyze the degree of satisfaction among participants of recreational programs and discuss types of recreation that would improve quality of life for them.

(受付日 : 2020 年 1 月 27 日, 受理日 : 2020 年 2 月 10 日)

古市 孝義 (ふるいち たかよし)

現職 : 大妻女子大学人間関係学部人間福祉学科 助教 (実習担当)

日本社会事業大学社会福祉学研究科社会福祉学専攻博士前期課程修了。現在同博士後期課程在籍中。専門は高齢者福祉、高齢者介護、介護記録、介護の質、介護現場のハラスメントについての研究を行っている。現在は、大妻女子大学人間関係学部人間福祉学科の実習担当助教として介護福祉士養成における実習指導、介護福祉士養成教育に携わっている。